目次

研究篇

光源氏の生涯……高橋　和夫……七
浮舟の出家……増田　繁夫……三九
「ふるごと」と源氏物語の新美質……淵江　文也……七三
——諸注拾遺として——
源氏物語の書状……久曽神　昇……二七
源氏物語における歌枕の種々相……奥村　恒哉……一五五
「桐壺巻」冒頭について……竹内美智子……一八三
——その解釈と位置づけ——
源氏物語の和歌……松田　武夫……三二
——無名草子のふしぶしの論を中心に——

名霧の造型と和歌……小町谷照彦……三五
——落葉宮物語をめぐって——
源氏釈の形態……伊井　春樹……二九
伊勢の御と紫式部……村瀬　敏夫……三五

資料篇

宮内庁書陵部蔵「源氏物語注釈」所収『源氏或抄物』（源氏釈）……伊井　春樹……三一

研究篇

一、問題提起

源氏物語は、その昔、「げんじのものがたり」と呼ばれていたように、「源家の祖、光源氏の生涯の物語」もしくは「源家の祖、光源氏とその子薫、二代の物語」と理解することができる。不思議なことに、源氏物語をかように理解することは、家父長制的家族主義が、国家公認の国民的イデオロギーであった明治以来、太平洋戦争敗戦時に至るまでの国文学界では、論義・研究の主題として顧慮されることがなかったと思う。この頃の源氏物語論といえば、「もののあはれ」の情趣論または美的享受の論か、あるいは、登場人物の性格評論で賑わっていた。わずかに、国文学界としては傍流であった折口信夫が、源氏物語に家の思想を読みとった着想を見るに過ぎない。

それだけではなく、家とまでは言わず、主人公光源氏個人に限ってみても、明治以来の源氏学は、彼の生涯という個体史を、全体的な、統一された視点から見るということにはなかったと思う。あるとしてもせいぜい筋書を記述するといった程度で、その折々の事件や人物像が別々に活躍させられていた。

このことは偶然ではなかろう。日本の近代小説を手許にある簡単な年表で繰ってみると、この家の歴史を描いた小説、またはその中における個人の生涯を叙述した小説を探しても、わずかに島崎藤村の夜明け前一作である。加えても、志賀直哉の暗夜行路である。ただし数多く存在するのは、一作家の数作品を並べて、かりに一つの大小説と考えると、夏目漱石のもののように、浮かび上って来る。いわば、彼の体験の総和とでも言える。これに対して、西欧小説では、赤と黒にはじまって、虚栄の市、ジャン・クリストフ、ブッテンブローク家、チボー家の人々と、かなりの程度挙げられる。まさしく、ロマンの伝統は西欧にあって、近代日本にはなかったのである。家の問題をあれほど日本の近代文学は採り上げ、作家はそれと苦闘したと言われていながら、その家は、今現に彼の前にある短い歴史の断片と闘っているのであって、作家は芸術の上でも克服できず、敗北者になり終っている。